

## 第2次世界大戦後の給水需要に対応するため、 第1次拡張事業に着手する。

昭和2年7月に給水を開始した本市の上水道は、その後の市勢の着実な発展に伴う給水人口の増加や給水区域の拡大により給水需要が高まり、第2次世界大戦後、その対応を早急に迫られることになった。

このため、昭和26年から、三芳浄水場の増強工事と滝尾地区への配水管の布設等を主体とする第1次拡張事業を実施した。

### 第1次拡張事業

#### 認可年月日

昭和26年11月10日

#### 計画目標年度

昭和40年度

#### 計画給水人口

100,000人

#### 計画1日最大給水量

28,000m<sup>3</sup>

#### 着工年月

昭和27年4月

#### 完工年月

昭和32年8月

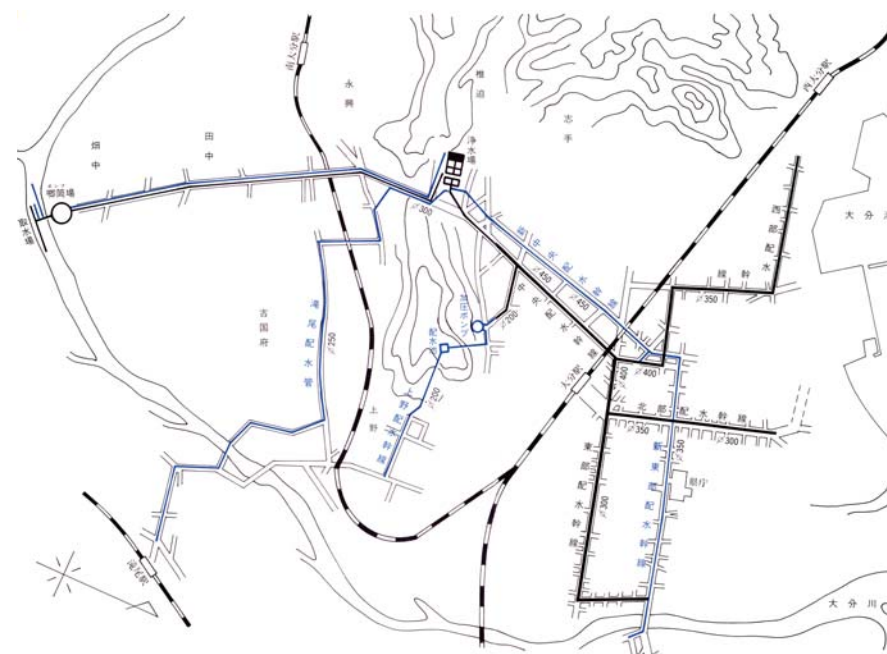
### 戦後の給水問題解決のため 拡張工事に着手する

日本が敗戦の傷跡からようやく立ち直る兆しを見せはじめた昭和22年、初の公選により市長に就任した上田保は、着々と広大な都市計画の実現を図っていた。

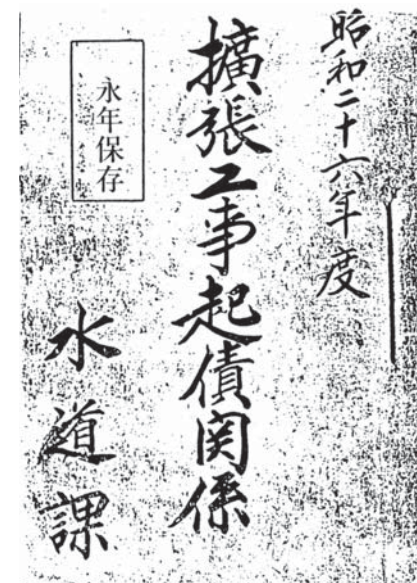
建設資材はもちろんあらゆるものが不足していた当時、「何をすることも最少の経費で最大の効果を上げよ、すべてが創作だ、政治はなおさらのことだ…」という市長の考えは新たなアイデアを盛り込んで、工事においても実現されていった。たとえば、墓地公園、大規模な道路の拡張、優雅で芸術性に満ちた遊歩公

園、野趣に富んだジャングル公園などその一例で、この市長のダイナミックな政治力に、人々は驚異の目を見張った。

この間、本市の水道は経営面では物資不足による物価の高騰の影響を受け、昭和21年から3年連続で年2回の料金改定を余儀なくされた。一方給水需要は、外地からの引揚者、疎開者(1,599世帯、7,530人)、戦災者の帰宅等に加え、合併により市域が2倍以上になり人口が急増したこと(昭和25年10月国勢調査による人口9万4,455人)、また、工場、各種施設の建設が相次いだことから急増し、昭和25年夏には、過去最高の1



昭和32年当時の水道要図



第1次拡張工事関係書類

日最大給水量13,500m<sup>3</sup>を記録した。幸いこの年までは、鐘淵紡績(株)大分工場(日本人造羊毛株式会社を合併)の自家用水道を一時使用して、どうにか断水や時間給水だけは免れてきた。しかし、このような臨時的措置では伸び続ける給水量を考えると、とても現状の水道施設では対応

できないことが明白であった。

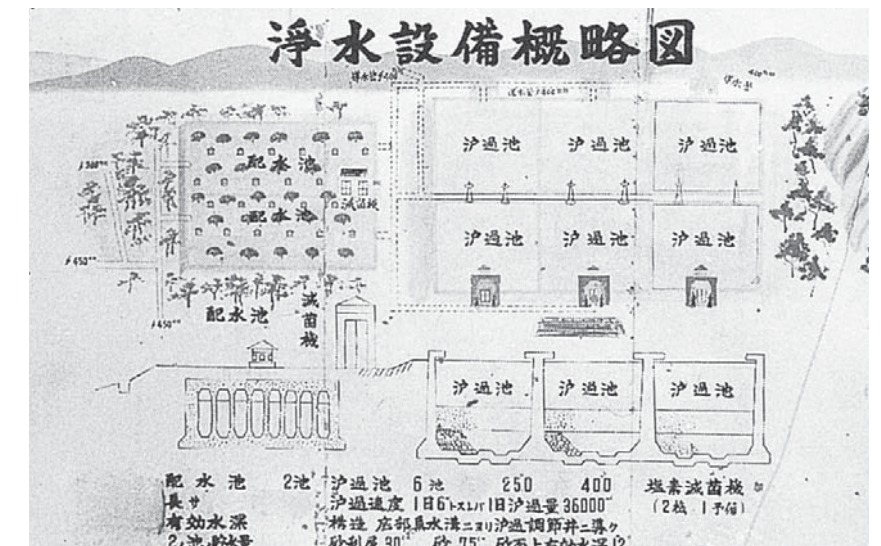
また、合併地区の一つである滝尾地区は上水道設備がないため、毎年、消化器系伝染病が発生し、火災の際には消火に手間取るなど保健衛生及び防災の観点から、この地区への上水道の布設が急務であった。

このため昭和26年3月、上田市長

は増加する給水問題解決の決め手として、計画給水人口10万人、1人1日最大給水量280ℓ、1日最大給水量28,000m<sup>3</sup>の上水道拡張5か年計画を企画し、昭和26年11月10日厚生省分衛第197号で、厚生・建設両大臣の認可を得て工事に着手した。



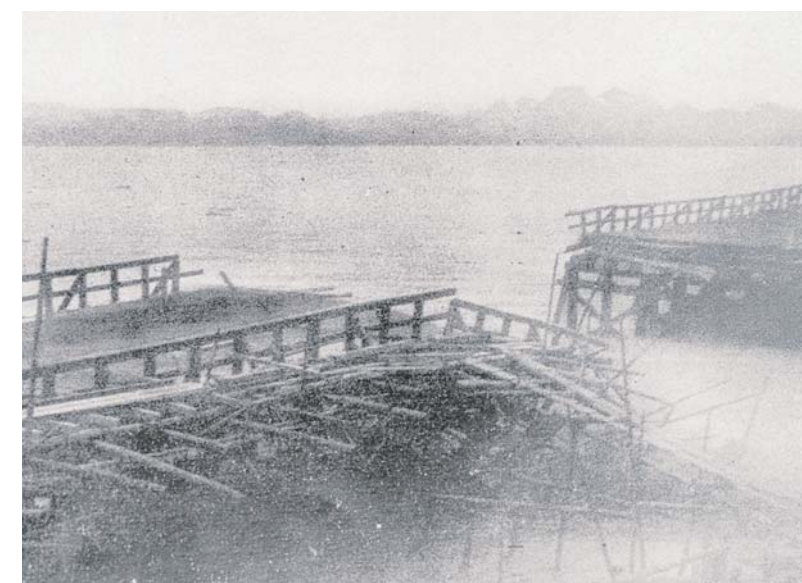
認可書



三芳浄水場概略図



### 昭和28年6月26日の大水害により、 市中心部の舞鶴橋が流失。



舞鶴橋流失の瞬間(大分市史から)

昭和28年6月25日から27日にかけて、大分県下は66年ぶりと言われる豪雨に襲われた。

大分市ではこの間600mmを越す雨量を記録し、6月26日、市中心部の舞鶴橋が流失、滝尾橋付近や尼ヶ瀬地区など8か所で堤防が決壊するなど、床上浸水1,566戸、床下浸水7,752戸、道路の決壊8か所などの大災害となった。

この豪雨で津留、萩原、高城地区が中島6条～今津留間の大分川に伏越しをしていた口径150mm管の流失により給水を絶たれた。特に、東大分地区は復旧までに2週間余を要したため、1,000戸余の住民は、雨水をバケツやタライにためたり、井戸の急設や隣接する当時の鶴崎町住友化学工業(株)の上水を消防車の輸送によってろうじて飲料水を補った。

5か年計画でスタートした拡張工事は、計画の変更により約1年遅れて完工。

第1次拡張事業の概要

水源施設

既設集水埋渠に加え、内径900mmの有孔鉄筋コンクリート管を延長260m埋設し、1日最大28,000m<sup>3</sup>を取水できる設計とした。

送水施設(送水管)

既設の口径406.4mmの鉄管2,600m1条と並行して、口径400mm铸铁管2,650mを布設した。

浄水施設(ろ過池)

既設の緩速ろ過池4池に加え、鉄筋コンクリート造りで幅25m、長さ40m、ろ過面積1,000m<sup>2</sup>の既設ろ過池と同規模のもの2池を増設した。これにより、ろ過速度5.6m/日で日量28,000m<sup>3</sup>の能力となった。なお消毒設備として、真空スーパー型塩素滅菌機及び湿式壁掛型塩素滅菌機各1台を設置した。

配水施設

(1) 加圧ポンプ場

上野高台地区配水用として、大字三芳167番地に加圧ポンプ場を新設し、同時に上野飯盛塚高地に容量600m<sup>3</sup>の配水池を新設した。

(2) 配水管

・新中央配水幹線(三芳配水池～大

道新道～高砂町)

- ・新東部配水幹線(高砂町～舞鶴橋左岸)
- ・滝尾配水幹線(三芳配水池～南太平寺～古国府～滝尾)
- ・上野配水幹線(中央配水幹線～加圧ポンプ場(太平町)～上野配水池～上野)
- ・南大分地区等での配水管拡張

5か年計画の拡張工事は計画変更を余儀なくされる

本拡張工事は当初、昭和26年度からの5か年継続事業としてスタートし、懸命の努力を続けた。しかし、諸物価の高騰による財政事情の悪さに加え、昭和28年6月26日の集中豪雨による大水害、さらに大分川河川

改修計画によりますます河床が低下し、計画取水量の50%にも満たないことによる水源施設への支障、及び都市計画事業の遅延による一部配水管布設工事への支障等、さまざまな要因が重なり、一部工事の設計変更と工期の延長を余儀なくされ、昭和31年7月、水源施設である集水管の延長とポンプ施設の増強を中心とした工事の変更を行った。昭和32年8月、工事費は1億7,517万7,000円と膨張し、第1次拡張事業が当初の予定より1年余遅れて完工の運びとなった。



ろ過池増設工事の完成間近を伝える当時の大分市報(昭和31年6月1日号から)



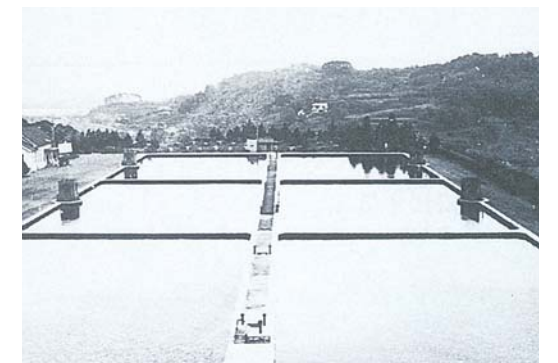
上野配水池開栓式(昭和29年7月10日撮影)



増設工事の三芳浄水場ろ過池



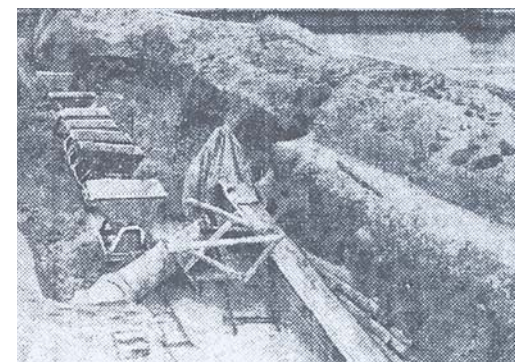
完成した北下郡配水管(昭和29年4月2日撮影)



拡張後のろ過池(昭和31年6月撮影)



拡張工事を急ぐ畑中ポンプ場(昭和32年8月1日号 大分市報から)



ろ過池の増設(昭和30年7月2日付 大分合同新聞から)

